ことばを　そっと　おしひらく　10

——2018 年 2 月に出会った詩

青木由弥子

今月は、詩で遊ぶ、言葉で遊ぶ、ということを考えてみたい。

まずは、誌名そのものが**『詩遊』**と題された、**冨上芳秀**発行の大判の詩誌から（№５７　2018 年 winter 号）。

誌面は二段組になっており、上部三分の二に詩作品、下段には少しポイントを落し行数も増やしたレイアウトで、別の詩作品や書評などが掲載されている。すっきりとして見やすい誌面であると同時に、ごはんとおかず、のような読み方もできるし、メインを楽しみ、また異なった味わいを気分を変えて楽しむ、など、気分を切り替えながら読むことができる。

詩集**『鹿ヶ谷かぼちゃ』**（2013）**『発車メロディ』**（2016）で、リアルな体感でエロスとユーモアの渦巻く虚構世界を鮮やかに描き出した**林美佐**子の作品から、「青虫」を紹介する。試みとして、作品の右側に、私のコメントを付していくスタイルで記してみたい。いわば、同時通訳ならぬ、同時読解である。

家族を送りだして
洗い物をすませて
天気もいいし
排卵でもしようかな

蒸れたローズガーデンで
また会えるとすれば
あなたは青虫
私も青虫

天気もいいし・・・ふつうなら、散歩でもしようかな、とつぶやくところに、「排卵」を持ってくる驚き。排卵痛や、若干の出血などのある場合や、ホルモンバランスの変化を汗のかき方や上気の加減などで感じ取る場合もあり、排卵の時期を感知することはあるが、自らの意志で「産める」ものではない。卵という言葉の持つ力を敏感に察知する作者のセンスが存分に活かされた一連目に掴まれる。

お腹のすかない日はありません
花芽を食べましょう

鶏卵なら
手のひらにも乗るけれど
私のは今ごろ
どの辺を通っているのでしょう
今度あててみてください

霧笛橋の下の閲覧室で
また会えるとすれば
あなたは本
私も本
読まれたくなんかありません
消えてしまいましょう
青虫でも踏もうかな
踏まれた庭の青虫はポンとはじけ
空から赤い血が降りだしました

とんとんと、リズミカルに進んでいく進行。ローズガーデンというロマンティックな場を設定しながら、季節の質感を表す「蒸れた」という一語が、男女の閨での熱い交感へとすりかわる。食べるという行為のエロティシズムと、青虫の様態や質感が喚起するイメージ。花、花芽が秘部を暗示すると読むのは、深読みだろうか。

軽い転調をもたらす三連目は、一連目の卵を受けて鶏卵のイメージまで持ってくる。言葉そのものが喚起するイメージで遊んでいる部分。

「霧笛橋」は実際に在る橋の名だが、伍代夏子にも同名の歌がある。許されぬ恋を切々と歌い上げる演歌を借景に、さらに転じて、閲覧室での再会に相がずれる。二連目の歌うような調子のリフレインで緩やかにつなげるところが心憎い。

本同士での再会が暗示するシチュエーションは、詩人や小説家など表現者同士の密会を想定しているのだろう。破たんした恋と、それゆえに捨て去ってしまいたい自身の記憶、湧出する暴力的な衝動が、「あなた」と「私」の喩でもある青虫を踏むという行為と、空から鮮血が降るという鮮明なイメージによって体感的に視覚化されている。

一つの物語とまつわる情動が、歌うような自然な調子で、さりげなく凝らされた技巧と共に明解な言葉と形式の内に収められた面白さを賞味したい作品である。

夢のような不思議な世界を描き出した、**冨上芳秀**の「ゲームの夜」も紹介したい。

夜、歩いていると背後から女の声がしました。「もしもし、わたし
とゲームをしませんか」振り返ってみると白い和服姿の美しい女が

月明かりに浮かぶように微笑みかけていました。どこか懐かしい古くからの知り合いのように感じさせるのですが、全く見たこともない女でした。 女は私の心を見透かすように、「案内しますからついてきてください」とすたすたと歩き始めました。（中略～

～中略）つまり女と私との間は一定に保たれているのでした。小さな川に架かっている橋を渡りました。しばらく行くともう少し大きな橋を渡りました。また少し行くともっと大きな橋を渡りました。次にまた小さな橋を渡るということを何度も繰り返しているうちに私はふと同じところをぐるぐる歩いているのではないかという気がしました。ここはいったいどこなのだろうか。この町にこんなに川があるはずはない。大きな橋を渡った時、後ろを振り返ると渡った橋が消えているのを見つけました。前方を見ると女は私の方を振り返ってニッコリと笑いました。「そうですよ。あなたはもう後戻りはできないのです。これが私たちのゲームなのです」こうして私は今でも女の後を歩いているのです。

徹底して平易な表現、丁寧な描写が、静かに情景を立ち上げる。読者の目を留めたり、時には遮ったりする特異な表現やユニークなリズム、難解な比喩などは、ひとつも用いられていない。そのことによって、いわば地の文の透明度が増していく効果が生まれる。水のように違和感なく入って来る文体の向こうから、何度、橋を渡っても、これといった目的地に辿り着かない、しかも、渡る度に橋が消え、後戻りのできない、前進のみ許されているような町の不穏な夜の底に、閉じ込められている主人公の姿が浮かび上がる。女と語り手の他には、誰もいない場所。破綻や感情の高ぶりを示すことのない静かな語りは、語り手が困惑や焦燥からは免れていることを感じさせる。キリコの描いた、異空間の町を彷徨っているような感覚を覚える。白い和装の女性は、欧米ならギリシア風の衣装を身に着けた女性として現れるかもしれない。主人公が謎の女に導かれたまま、行く先の知れぬ逡巡を続けている。それは、ミューズに導かれ、定かならぬ場所に向かって前進し続ける他はない「詩人」の在り方を表しているのかもしれない。

今挙げた二作は、語り手自身の五感を通じて得られたことを、語り手内部の視点から綴っている。語り手が作者の分身のように、濃厚に自己投影される時もあれば、実在の人物をモデルにして、その人から見た視点で歌う場合もあるだろう。架空の人物を設定して、その人物の五感で世界を感受しようとする場合もあるだろう。語り手の内部に視点を設定するか、外部に置くか、視点を移動しながら綴っていくのか。そんなことを考えさせられた二篇を引用する。

藤原游、黒崎水華、瀧村鴉樹の三人が創刊した詩誌**『夜鷹』**。誌面は黒、文字は白抜き、上下に白大理石（マーブル）模様の帯が入るというレイアウトも、目を引く新鮮さと共に『夜鷹』という詩誌全体のイメージを醸成している。

シュルレアリスム的な技法と言えばよいだろうか、詩行の進行に予想外の驚きや飛躍を多数織り交ぜ、そこから次々とイメージが立ち上がるような**藤原**、色彩が喚起する多彩なイメージと言葉の響きがもたらす効果とを巧みに融合していくような**黒崎**、詩作品というよりはアート作品のような、レイアウトとタイポグラフィーで“見せる／魅せる”**瀧村**、三人の同人の作品も面白かったが、ここではゲストの中から、**中林佳貴**と**元ヤマサキ深ふゆ**の二篇を紹介したい。

まずは、語り手の視点と作品中の「私」の視点が重なっている、**元ヤマサキ深ふゆ**の作品から。題名は「おやすみなさい　良い夜を」だが、作品は夜明けの描写から始まる。

明けていく濃藍（こあい）が掻き消されていく
規則正しく生きている人々の　美しく伸びた背筋の波に遡る
肌を刺す朝は灰白く　左手　白い紙カップ　刻印された幸運の数字
立ち昇る焙煎された香りを引き連れて

朦朧とした自律神経が　身体の中で目覚めていく幽かな兆し
あぶりだされていく　　あおいろ
右隣に佇む自動販売機の赤白は　いつまでも錆びることなく

触れもせず　見もしない　傷が　柔らかい音を立てて静かに裂ける
かじかむ指先から鎔けいる朝が血液に則って胎内に這入（はい）る
凍えていく痛覚　その一拍　一拍を　誤魔化すハミング

醒めた朝日に融解していく　私の名前を呼んだ声
甘く　歯噛み　とけ合っていた筈の波が　層を生して
露わになった薄い肩先を　侵食していく　ぬくもりが刺す
背筋から首筋まで　貫き通す　感触　悦楽
吐息がはらむ熱に煽られる　なぞり舐め上げられる肌

なにもない胎内に
　　一　　拍
注がれていく　白濁　粘性　私　が　解（と）けていく

「こんなものじゃなくてもよかったのに」

上弦の月　積み上げてきた筈の言葉が崩れ　喘ぎ漏れ出る音は
先端　融ける　まとわりつく　甘く　まろく　醜い　感傷
ゆるいわたしがしたたりおちる
脆く　剥がされていく欠片　いれて　掻き出す　ヒタリ　・・・・・・。

いつから身籠った？こんなもの

選り好まず　享け入れ　感じ取った全てが　翳に潜み
錆びた浅葱は鮮やかに　私の口蓋を満たしていく

（弓張月は　もう　いない）

「規則正しく生きている人々の　美しく伸びた背筋の波」夜明けの街に一斉に現れる、濃色のスーツの後ろ姿、その「人波」の景が浮かぶ。そこに「遡る」という動詞が付くことによって、景が動き出す。波、という言葉と「遡る」は無理なく結びつくが、早朝の街を行く人々の後ろ姿、という景とは、うまくつながらない。遡る、のは、まだ明確に姿を現さない、語り手の意識である。思いが、さかのぼる、のか。「立ち昇る」コーヒーの香りと

湯気が、「私」の意識をさかのぼらせる、のか。

一連、二連と、語り手の意識が目覚めていく様を描写しているのだが、三連目から情景と意識と体感が、空想力によって豊かに混交されていく、そこが面白い。意識の目覚めとは、内面の「傷」が裂け、過去の記憶や想いが立ち昇ってくる（遡って来る）ことでもあるのだろう。紙コップのコーヒーから指先に伝わる熱さが、肉体を目覚めさせていくのだが・・・それを「鎔け入る朝が血流に則って体内に這入る」と表現する。溶でも融でもない。金属が溶けるような、灼熱の朝焼け、血潮の持つ金気、朝の空の赤さを文字から想起する。血流に乗って、ではなく、則(のっとって)って、という言葉の使い方は、全身を巡る血流の規則に従って（有用なものを運び、不要なものを流し去る、新しい酸素を運ぶ）というようなニュアンスも含まれているだろう。「朝」が「胎内」に入る、それも、ただ入るのではなく、這入(はいる)る、と這いこむイメージの言葉を用いている。「朝」を胚胎する、ということ。そのナンセンスとも言えるイメージが、巧みな感覚の表現と文字の効力を活かした使い方によって、リアルに体感される。ヨガで太陽が体の最深部で輝くイメージをトレーニングすることがあるが、元ヤマサキの「鎔け入る朝」「醒めた朝日」にも、似たような感覚を覚えた。

面白いのは、内部に輝きだした「朝日」に、「私の名前を呼んだ声」が「溶解していく」感覚。どこからともなく「私」を呼ぶ声とは、超越的な次元から存在に対して呼びかけた声かもしれない。夜と朝が交代し、自意識と内部の体感が目覚めていく過程。そこに外から「私」を呼ぶ「声」があり、その「声」が「私」の内部と溶け合い、内部からも「私」は名を呼ばれる。この時点で、「私」という外殻は意味を持たなくなるだろう。「私　が　解(と)けていく」のだ。様々なものが覚醒し、流動し、溶け合い侵蝕し融合していく、という精神的高揚感の訪れる朝が、世界と私とが交合する時間として捉えられている。さらに、その高揚感の中で身ごもるのは、朝（はじまりの時間）を胎内に導き入れ、「私」と溶け合わせたあとに誕生する「言葉」である。言葉は、産道ではなく、口腔から産出される。金属が鎔けたような赤から「錆びた浅葱」へと刻々と色を変えていく、朝の時間の経過と共に。

続いて、**中林佳貴**の作品、「地球になったプードル」。

月へ向かう宇宙舟に乗ったプードル
まるい地球を宇宙舟の窓から見つめていた
優しい両親を想っているのか
友達がくれた美味しいドッグフードを想っているのか

小さくなっていく地球を
自分の体から離れていく魂みたいに見つめていた
離れれば離れるほどに
蜃気楼は近づいていく
小さくなれば小さくなるほどに
雲は大きくなっていく
君は地球を見つめて
君の中に犬小屋ほどの地球を宿す
すると君は月へ向かう地球みたいなものだ
月へ向かう宇宙舟に乗った地球
丸い地球を宇宙舟の窓から見つめていた地球

犬小屋ほどの海
犬小屋ほどの山
犬小屋ほどの空の下で
犬小屋ほどの生きものたちが営む生命の讃歌
犬小屋ほどの夢や現実もいさせておくれ
月へ向かう君の地球にいさせておくれ

その時、月から地球へ向かう月が飛び立った
それは、ある地点で月へ向かう地球と交差する
それはまるで恋人たちに希望とより深い孤独を実感させるエピソードみたい
な交差地点
瞳と瞳が一瞬合った
ここからは連綿と続く星の軌道のように離れていくだけ
次に会うときは埴輪のような空っぽの宇宙舟だけが交差する
それが寂しいことなら宇宙は寂しいよ
青くて丸いプードルが
小さな地球を見つめている
自分の心から増えていく心みたいに

これより君の中に月になった三毛猫がはいっていく
どうか暖かく迎え入れてほしい

主人公は「プードル」。語り手はその内面に入り込んでプードルの視点で語る（擬人化）のではなく、外からの観察者の視点で物語始める。中林は「プードル」を「君」と呼び変え、「地球を～魂みたいに」という伏線を受けて「君」の内部に「地球」（のイメージ）が宿っている、と導いていく。「すると君は～地球みたいなものだ」、つまり君は地球だ、というロジックが成立するわけだが、「君」は「月」へ向かう途中であったわけだから、「地球」が「月」へ向かって飛行する、という奇妙で愉快なシチュエーションが出現する。

次の連で、「プードル／君」の内部の地球の上に存在するモロモロの一人、としての語り手が一瞬姿を見せる。君、と呼びかけることによって、君（恋人、友人、読者）内部の世界に僕をいさせておくれ、という呼びかけに転じ、「月」と「地球」の関係性が、二人の関係性へと転喩し、やがて、プードルと三毛猫／わたし（ぼく）とあなた（きみ）へと重ねられていく。

「月へ向かう宇宙舟に乗ったプードル」から、
「月へ向かう宇宙舟に乗った地球」
「月へ向かう君の地球にいさせておくれ」
「月から地球へ向かう月」
「君の中に月になった三毛猫がはいっていく」へと手品のように流れていく言葉。イメージが奇妙に混交し、内部と外部が入れ子のように入れ替わる。ロジックに無理がないのに、ナンセンスな言葉遊びのようなスタイルが生まれる面白さ。**秋亜綺羅**に**『ひよこの空想力ゲーム』**という魅力的な詩集があった。秋の手法とはまた少し違うが、軽やかに言葉に付随する意味やイメージを転じていく流れや、軽快に弾んでいくような文体が楽しい。

外部の実在が内部の心象となりその心象の方がリアルに体感される、という現象を体感してはいるものの、うまく言葉で説明できない・・・そのもどか

しさを、言葉で“遊びながら”示してくれた、という“楽しさ”である。

言葉の楽しさを活かした作品を２篇、挙げておこう。まずは、**日原正彦**発行の**『橄欖』**108 号より、**伊藤芳博**の「こばと」

うで　が　つくえ　に
うでつくえ
あし　が　ゆか　に
あしゆか
あたま　が　くうき　に
あたまくうき

とけて
ひとつになっていく

うでつくえかたかべ
くびせなかまどそら

ことばとはなんだろう
こばととはなんだろう
ん

とけて
せいれつしていく

あかさたな
はまやらわ
ん

おことおなんいうと

以前、ほおづえをつく、という言葉を聞いて、老人の杖を思い浮かべてしまった子供の話を聞いた。机の足、花瓶の胴など、人体の比喩を家具や調度にあてることもある。家計が火の車、これをリアルなイメージで映像化すると、かなり怖い。

言葉のちょっとした言い間違えや入れ替えから、まったく別個のイメージが広がることもある。意図的にそれをやってみることによって、知らぬ間に組み込まれた自然の意図に気づかされるような、そんな感覚を覚えることもある。

天気＝晴れ＝あっけらかん、明るい、のどか、というイメージと、脳＝思考、思想が結びついて「脳天気」なんて言い方があるが、あたまくうき、とは、どんな状態だろう。

かた／かべ　片壁　固壁、せなか／まど　中窯、鎌、釜　窓・・・

名前のアナグラムなどは、組み合わせの可能性を無邪気に試しながら遊んでいる内に、心に響く文字の組み合わせと出会うという、偶然の出会いの面白さがある。偶然に発生する文字列は膨大な量があるが、その中から心に響いたもの、面白いと思ったものを選び出す、という操作が加わる。

おおなんということ
おとこ　おんな　という
であいから
とけて
とぶ
こばと
ふしぎだ

おおなんという、が、男　女　という　に組み替えられるとは面白い。雄雌の睦まじい求愛の仕草や、甘くくぐもった鳴声、ダブ、という音とラブの響きの類似、（さらには聖霊が鳩の形をしてくだった、という聖書の記載なども踏まえて）愛の象徴とされる鳩が、「ことば」の中から飛び出してくるのも、たしかに「ふしぎだ」。

続いて、**頼圭二郎**発行の**『ぱぴるす』**122 号より、**岩井昭**の「むしいろみおちて」

かきのみが落ちたよ
しずかにではない
よるのはてしないみみに
ドスーンとおとたてて

　むしいろみ
　むしいろみ
　落ちてどこへいくのでしょう

やみのむこう
シーンとしたしんや
じゅくすまえのだくてんが
ちひょうにいっしゅんひろがる

＊

こちらがわには落ちない
あちらがわにも落ちない
いきばなくうえからした
落ちるときには落ちるのです

こちらも、わらべ歌のような一篇。虫いろみ、とは、虫に食われたりして腐ったように熟すこと、だという。色味がかる、ということか。膿んだように熟した実が、「しずかに」「ドスーンとおとたてて」落ちる、という単純な矛盾。この不思議をつなぐのが、夜の果てしない耳。夜の出来事、肉体の目には見えない事態に、じっと耳を澄ませている心の耳である。

語り手は（この場合、作者自身とほぼ重なっている）、闇の中で繰り広げらているであろう、柿の実の落下に想いを馳せる。順調に、おいしく熟した実ではなく、あちこち傷み、ぐずぐずに熟れて、落ちると同時に八方に飛び散る柿。濁点が言葉に付くと、濁るような野太さを増すような感覚があるが、熟す前（本来の生をまっとうする前）に、無残にも地表に叩きつけられ、その生涯を中途で終えた・・・そんな思いが重ねられているように思う。

むしいろみ
むしいろみ
落ちてどこへいくのでしょう

あきのそらにも
もったいないまんまる
とうめいなつきがゆっくり
あしたへ落ちていくね

あした、へ落ちる月。彼岸でもなく、此岸でもなく、落ちる時には落ちる。柿の実の落ちる景を思いながら、死の時について考えている作者と、作者が生きている世界を、月が静かに見つめている。

月の持つ、ルナティックな力。それは夜の力であり、無意識と連動する未知の力でもある。人の生理の奥深いところまで揺さぶりをかけてくるような、そんな不気味な美しさが、古来から人を惹きつけて来た。

月の表紙が印象的な**『ざらざら』**２号を紹介しよう。制作は**「月夜のうさぎ」**2013年に結成した文芸サークルだという。「心斎橋大学卒業生を中心に自然発生し、その後発展。」と後書にある。やはり月夜の表紙だった**『夜鷹』**も三名の同人からなる同人誌（ゲストを迎える）形式だが、**『ざらざら』**２号も**小西アマリリス、ブン・ブンコ、荒城美鉾**の三名が「同人近況」欄に執筆している。（創刊号には、同人として**柿埜種三郎、平居謙**の名もある）ユニークなのは短編小説、詩、エッセイを隔てなく載せている事。同じ作者の小説と詩作品を読み比べながら、作者がどこにその境界を引いているのか、探ってみるのも面白い。**小西アマリリス**の「に時間」を引用する。

どこかでひっそりととまった
時計の針を外して
小さな旅に出る
に時間

ここに
いるのに
あなたに
届くために

けれど会わない選択をして
雲を追いかけてみる
遠景へとまっすぐに伸びる
心

に時間に
すっぽりとはまっていく

最も柔らかい部分について
知っていることと本当のこととの差異
空と海がグラデーションをつくる
その色調の境目あたりで
どこに存在するのか
何もかも曖昧に
いつのまに
そんなに
に時間

雨音が近づいてくる
グラデーションは縦に引き裂かれて落ちるだろう
呼び戻してみるが
濡れ始めた心は
少し重くて
言う事を聞かない

に時間。二時間、あるいは２時間と、なぜ書かないのだろうと思いながら読み始める。「時計の針を外して」現実の時間、物理的に過ぎ去っていく時間に左右されることなく、自らの心の中だけで感じられる時間を過ごすための、時間。実際に２時間くらいかもしれないが、時計で計れない時間でもある。

旅に出る、とあるが、これもまた、列車や車を利用した現実の旅であるかもしれないし、心の中だけで体験する、夢想の中の旅かもしれない。面白いのは２連目。「に」という助詞（のに、もあるが）が続き、～に、のための時間、という造語がぼんやりと見えて来る。

心と体の境界、柔らかい部分（そのときによって、脳、心、愛を確かめる場所…と異なるだろう）とそうでない部分との境目。肉体の感覚が確かめることと、五感が心に作り出す、もうひとつの感覚器官が感じ取ることとの、境目。「あなた」へと伸びていく、（わたしの）心、そのありか。漠然とそのグラデーションを彷徨っている旅の時間が「に時間」なのかもしれない。

最後に、**大西美千代**の個人誌**『そして。それから』**１９号の中から、美しい写真を組み合わせ、さらに言葉を添えた見開きページをお見せしたい。幾通りにも読めそうな、見る人事に用意されたストーリーが見えてくるような、素敵な組み写真と言葉である。

なれそうな刻

会えなくなった人がいる

気配だけの
さびしい魔ものに

からだを脱ぎ捨てて
会いに行く

何事もなかったように
帰ってくる
また少し年をとって

どんなものにも

幽刻